

氏名 上石 景子

学位の種類 博士（地域研究）

学位記番号 国博甲第8号

学位授与の日付 令和4年3月20日

論文題目 古代ジャワの宮廷詩『ガトートカチャーシュラヤ・カカウイン』
研究—ラングー＝「美」の観念を紐解く—

審査委員 主査（教授）松田 京子

（教授）青山 亨（東京外国語大学）

（教授）蔡 毅

（教授）森山 幹弘

1. 論文の内容の要旨

本論文は、インドネシアのジャワ島に栄えたイーシャーナ王朝時代の宮廷詩人ムプ・パヌルによって、インドの二大叙事詩のひとつであるマハーバーラタの物語から着想を得て12世紀後半に創作された韻文テキスト『ガトートカチャーシュラヤ・カカウイン』（*Ghaṭotkacāśraya Kakawin*、以下『ガトートカチャーシュラヤ』）を研究対象とし、そのテキストに表現される美的観念を論じたものである。

古代ジャワの宮廷文学では、詩人が美を追求し、美に感応し、美によって得られる恍惚の感覚を自らの言葉で紡いでいくという経験が重要視され、この美的観念は「ラングー」（以下、「美」）と表現されたという。^{ラングー}「美」は、美をその意味の土台としながら派生し、恋（美しい者への思慕）や詩（美しさの表現媒体）も表し、さらに美そのものだけでなく、美によって得られる感覚や経験をも内包する観念と論じている。本論文が研究対象とする『ガトートカチャーシュラヤ』もまた^{ラングー}「美」を主題としており、主人公の英雄アビマニュとその恋人クシティ・スンドリー姫の思慕の念を描く物語の中で、「美」によって生じる快樂と苦悩がテーマとされる。本論文の構成は、序章、終章を含めて全5章から成り立っている。

序章では、古ジャワ文学の成り立ちについて、ジャワを含む東南アジアのインド化現象を概観したあと、古ジャワ文学の時代区分について先行研究を基に論述している。古ジャワ文学では、叙事詩やサンスクリットといったインドの文学の伝統をジャワが吸収していく側面と、インド由来の伝統をジャワ化していく側面があり、その両側面はインドの伝統のジャワ化が深まるほどに、ジャワ独自のものを生み出していくと論じている。

第一章では、物語の設定と登場人物の相関関係、テキストが創作された時代の特徴、宮廷詩人である作者に焦点を当て、テキストの構造と成立の契機について考察している。まず、物語の構造を理解するために必要なマハーバーラタの知識及びマハーバーラタから『ガトートカチャーシュラヤ』へ引き継がれた登場人物たちを取り上げ、テキストの概要を確認することから始めている。次に、序章で論じた古ジャワ文学の時代区分の中で、古韻文期に位置づけられる『ガトートカチャーシュラヤ』の時代的特徴を見ていき、古韻文期とは、インドの叙事詩に着想を得つつもジャワの独自性がテキストに現れていくジャワ化の面期となる時代であるとともに、王との結びつきによって宮廷詩人の地位が確立されていく時代でもあったと論じる。このような時代背景において、『ガトートカチャーシュラヤ』もまた、王と登場人物を関連づけることによって王の威信を高めようとしていることを論じる。最後に、作者の宮廷詩人ムプ・パヌルが『ガトートカチャーシュラヤ』を創作する以前に手掛けた2つのテキストとその内容を確認し、『ガトートカチャーシュラヤ』とは、ムプ・パヌルの詩人としての円熟期に、それまで携わったテキストの要素を織り込みながら創作された彼の集大成であることを述べる。特に、ムプ・パヌルの^{ラングー}「美」への信仰への姿勢について探っていく、詩人とは^{ラングー}「美」を追求する内面性によって詩人たりえるという詩人観および矜持が彼の中にあったと論じている。

第二章では、『ガトートカチャーシュラヤ』の受容に焦点を絞り、テキストと受容者の相

相互作用によって意味が生成されていくことについて考察している。『ガトートカチャーシュラヤ』は、それまでに培われた文学の伝統を引き継いでいる点、写本を書き写すことで継承されてきた点、語り手による朗読を想定している点から、『ガトートカチャーシュラヤ』とは、多様な要素の錯綜する織物<テキスト>であると論述している。そこで、『ガトートカチャーシュラヤ』に引き継がれている文学的な伝統を受容の側面から捉えなおすため、ジョナサン・カラーの「文学的能力」の概念を用い、『ガトートカチャーシュラヤ』の受容者があらかじめ了解していなければならない知識を整理している。次に『ガトートカチャーシュラヤ』とは、作者が自筆本を創作し、時代ごとの宮廷書記が写本へと書き写し、時には改変を加え、文献学者が本文校訂、翻字、翻訳を行うという3つの段階を経て構築されてきたものであると述べる。さらに、『ガトートカチャーシュラヤ』が朗読を前提としたテキストであり、語り手という主体もまたテキストの構成要素であることを述べる。そのパフォーマンスを通して、テキスト、語り手、聴衆を巻き込む一体感が生み出され、それら全ての受容者を物語世界に没入させていくパフォーマンス的な力の源となっていると論じる。

第三章は、客体としての美と、主体的な美への感応という2つの側面を持つ「美」^{ラングー}の特性に着目し、表現主体と客体という視点から『ガトートカチャーシュラヤ』を読み解き、それぞれがいかに受容者に働きかけているのかを考察している。まず、テキストに現れる詩人像が「美」^{ラングー}の表現主体として機能していることを踏まえ、主人公アビマニュに投影された詩人像を見ていく。そこでは、詩人による「美」^{ラングー}の神（霊性として認識される「美」^{ラングー}）への信仰のあり方が示され、その神との合一によって自我を失う感覚が恍惚のみではなく、不安や恐怖をもたらすことを論じる。また、詩人としての主人公の立場が、自然や女性の美しさを詩にのせる表現主体であるだけでなく、色ごのみとして宮中の女性の注目を集める客体であることを明らかにする。「美」^{ラングー}の客体として、ヒロインのクシティ・スンドラーによって体現される「美」^{ラングー}は、美しさ、もの哀しさ、か弱さといったイメージを有することを論じ、彼女がそのようなイメージの中で語られる背景には、彼女自身が不可侵かつ神聖な美しさを持つ登場人物であるのにもかかわらず、恋患いに蝕まれていくことで、そこに悲哀や憔悴が生まれると考察する。最後に、『ガトートカチャーシュラヤ』の中で描かれる自然がテキストの受容者の五感に訴えかけながら「美」^{ラングー}を体感させること、また、自然が登場人物の心情を代弁する景情一致の手法が見られることを論じる。さまざまな受容者が、一方では登場人物に感情移入していき、他方では登場人物を客観的に鑑賞することで、登場人物に近づいたり離れたりする動きを繰り返すことで受容がなされていると論述する。

第四章では、『ガトートカチャーシュラヤ』において受容者の脳裏に「美」^{ラングー}の世界観が醸成されていくうえで重要な役割を果たすメタファーについて考察している。メタファーとは、まさに詩人が事物に「美」^{ラングー}を吹き込む技法であり、代表的なメタファーとして、蔓植物、檳榔子、月とカッコウ、プダクを取り上げ、どのような情調がつくられているのかを論じている。まず、蔓植物はその形状から、登場人物を美的経験へと導く道しるべとしての役割、そして、そこに縛りつけ、木陰をつくりだして外界から隔離する役割を果たすことで、畏の

ように妖しいイメージを帯びている。さらに、蔓植物は登場人物が背負わされた「美」^{ラングー}の宿命を表すものとしても機能し、その罪深さとも密接に繋がっているとする。檳榔子は、嗜好品として物語に登場し依存をあらわすメタファーとなっており、快楽を与える一方で、依存から抜け出せない苦悩を与えるという、「美」^{ラングー}の繋縛の仕組みの喩えを表現するという。次に、光り輝く月とその光を求めて鳴き続けるカッコウが、慈悲深く救いを与える者と救いを懇願する者に重ねられている描写を見ていき、登場人物のあり様や心情を代弁する月（水のように流出する光）とカッコウ（月に向かって鳴く／泣く）のそれぞれが涙を連想させ、それによって哀愁が表現されているとする。最後に、古ジャワ文学において詩的情緒あふれる花とされるプダクを取り上げる。プダクの花で子どもを模した人形が作られ、それはクシティ・スンドアリーがアビマニュの世継ぎを産むことができないという結末を予感させるとともに、繁殖と次世代への継承、未来に繋がっていく堅実性、真の充足感をあらわす子どもと対比させることで、虚構としてのプダクの人形が一時的な快楽や儚さを意味すると解釈している。以上の4つのメタファーを通じて、メタファーが喚起するイメージが「美」^{ラングー}の世界を立体的に構築していくこと、そして、その世界には光と闇という両義性があると論じている。

終章では、第四章まで論じてきた「美」^{ラングー}の光と闇を掘り下げるため、快楽と苦悩という視点で物語全体の展開を考察している。アビマニュとクシティ・スンドアリーは、物語の中で快楽と苦悩に翻弄されるのだが、2人の快楽と苦悩は、必ずそれが訪れる予感があり、内面に抱いたものが現実を引き寄せるという法則が認められるという。『ガトートカチャーシュラヤ』とは、作者、登場人物、語り手、受容者が一体となって心の揺らめきを経験するテキストであり、その心の揺らめきとは、快楽と苦悩の背後にある2つの価値観の間の往来であり、その逡巡や葛藤という悟りに至らない俗なる心のあり様が『ガトートカチャーシュラヤ』を通じて描かれていると論じる。さらに、心の中の俗なるものに蓋をするのではなく、むしろ対峙していく姿勢、その経験により成熟していくことが示されていると結論づける。「美」^{ラングー}とは、手に入れようとすればするりと逃げてしまうものであり、また、主題であるにもかかわらずその全貌を完全に現さないものであるということを指摘し、新たな美的表現が創造されていくための余白を常に残すという「美」^{ラングー}の文学的創造性の可能性に繋がっているとして、本論文を締め括っている。

2. 論文審査の結果の要旨

本論文は古ジャワ語によって執筆された叙事詩を題材とした文学研究である。まず古ジャワ語は、世界的に読むことができる研究者の数が限られてきている言語であり、その言語によって書かれた宮廷文学の研究に果敢に取り組んでいることは評価に値する。19世紀以降にはオランダ人とジャワ人を中心にして古典ジャワ文学に関する文献学的な研究が進

められてきたが、それらの先行研究を渉猟するとともに、2016 年に出版された『ガトートカチャーシュラヤ』の画期的な翻字・英訳を活用して研究を行った。

先行研究を踏まえて、本論文では受容理論やパフォーマティブ性などの文学理論を用いて古ジャワ語のテキストを読み解き、ジャワ人の審美観と世界観において重要な観念としての「美」^{ラングー}を鍵に独自の解釈を提示している。新たな読みを支えるのは、物語世界に読者（及びオーディエンス）を取り込んでいく本テキストが持つパフォーマティブな力であり、物語の登場人物が表現主体として「美」^{ラングー}を感じるとともに表現することで読者にとっては客体にもなる関係性である。さらには、蔓植物、檳榔子、月とカッコウ、人形をその新たな読みのメタファーとして注目し、それらがいかに「美」^{ラングー}の世界を立体的に構築するのか説得的に論述している。ここに先行研究に見られない独創性と学術的価値の高さが認められる。

特に、終章の論述において展開しているように、日本の源氏物語研究の蓄積から着想し、ジャワ人の審美観の「美」^{ラングー}に快樂と苦悩、光と闇の両義性を読み解こうとする試みは独創的と言える。この比較文学の観点からの解釈は世界のジャワ文学研究、ひいては宮廷文学研究に学術的な貢献をもたらすと考えられ、本論文が英語に翻訳されて公刊されることが期待される。特にインドネシアの人々にこの論文で明らかにされた古代ジャワ文学研究の一つの成果が読まれることは、学術的にも研究倫理の観点からも望まれる。

論文の体裁については、全体の構成、各章の構成が論理的かつ理路整然と行われている。誤字や脱字はほとんど見られず、注、参考文献、古ジャワ語の引用とその翻訳が適切に行われており博士論文としての完成度は高い。特にテキストの翻訳は十分に練り込まれたものとなっている。一方、表と図は概ね的確なものとなっている。ただし、一部、表題を「表」ではなく「図」とするのが適切であることが指摘された。

今後の古ジャワ文学研究において、写本自体の文献学的研究を行うことで、異本との比較から新たなテーマが浮かび上がる可能性があること、他の古ジャワ文学テキストとの比較研究を行うことによる読みの深化、さらにはこのテキストで現れたメタファーが『ガトートカチャーシュラヤ』に特徴的なものなのかどうか、それらのメタファーが古ジャワ文学の中でどのように位置づけられるのかを考察することなどが、今後の課題として最終試験の中で議論された。

令和 4 年 2 月 18 日

審査委員 主査（教授）松田 京子
（教授）青山 亨（東京外国語大学）
（教授）蔡 毅
（教授）森山 幹弘